

発達障害児早期支援研究所活動報告書

所長 高橋 純一

○研究目的

本研究プロジェクトは、発達障害幼児を対象とした遊びの教室を展開することで、以下の目的を達成する。①幼児教室（つばさ教室）で遊びを通じた幼児への発達支援を行うこと、②保護者教室で保護者への支援（子どもの行動の捉え方、就学相談）を行うこと、③学生ボランティアによる活動および教員養成としての教育活動の3点である。

○研究メンバー

<研究代表者（研究所長）>

高橋純一（福島大学人間発達文化学類・准教授）

<研究分担者（プロジェクト研究員）>

鶴巻正子（福島大学人間発達文化学類・教授）

大関彰久（福島大学大学院人間発達文化研究科・特任教授）

<連携研究者（プロジェクト客員研究員）>

洞口英子（小学校教諭経験者）

工藤紀子（小学校教諭経験者）

○研究活動内容

1. つばさ教室の運営

1. 1. 参加幼児

医師により発達障害の診断を受けている幼児や診断は受けていないが発達面の心配のある幼児の計6名が参加した（4名は昨年度からの継続参加）。

1. 2. つばさ教室の運営

前期は5～7月、後期は10～12月に月2回（水曜の午後）に教室を実施した。残りの月2回は教室運営の準備の時間として、教材準備、ダンスや手遊び・歌遊びの練習を行った。

教室運営のスタッフとして、プロジェクト客員研究員1名（洞口）が主に担当し、学生ボランティアが15名参加した。学生ボランティアは、主に学部1年生であり（10名）、2年生（5名）も経験者として参加した。幼児一人に対して個別支援を担当する学生ボランティアを2～3名決めて、計画的・継続的に関わりを持つようにした。責任者として研究代表者と研究分担

者が対応した。

スタッフおよび学生ボランティアは13:00に集合して打ち合わせを行い、教室は14:00～15:30に実施した。幼児および保護者が帰った後、16:00よりスタッフはミーティングを持って、各幼児の共通理解や活動の改善および発展を図るようにした。

表1. つばさ教室の実施日程（平成29年度）

月日	内容	月日	内容
4月26日	顔合せ・教材準備	10月4日	教材準備
5月10日	第1回教室実施	10月11日	第8回教室実施
5月17日	教材準備	10月18日	教材準備
5月24日	第2回教室実施	10月25日	第9回教室実施
5月31日	教材準備	11月1日	第10回教室実施
6月7日	第3回教室実施	11月8日	教材準備
6月14日	第4回教室実施	11月15日	第11回教室実施
6月21日	教材準備	11月22日	第12回教室実施
6月28日	第5回教室実施	11月29日	教材準備
7月5日	第6回教室実施	12月6日	第13回教室実施
7月12日	教材準備	12月13日	教材準備
7月19日	第7回教室実施	12月20日	第14回教室実施
7月26日	OB会		

1. 3. つばさ教室の活動

教室の流れとして、表 2 に示す。

幼児が入室した後に「自由遊び」を行った。幼児の興味にもとづいて、学生ボランティアとともに活動するものである。

「自由遊びの後、「始めの会」を行い、「今日の活動」に移った。「今日の活動」は、毎回異なる内容であり、スタッフおよび学生ボランティアが準備したものである。“幼児の体の動き”、“小集団による友達との活動”、“約束ごとへの意識”、“気持ちの安定”を目的として実施した。例えば、“おちたおちた”の手遊びや“タッチリレー”、“フルーツバスケット”、“新聞紙で遊ぼう”などがあつた。

その後、「個別学習」として、幼児の“書く”、“描く”、“見る”、“読む”、“手の操作”などの学習を図るために、幼児の興味に応じて教材を準備し、実施した。

学習の後に「おやつタイム」を設けて、“友達との場面共有”、“約束ごとへの意識”などを身につけられるようにした。

最後に、「帰りの会」を行って、教室を終了とした。

表 2. つばさ教室の活動の流れ（平成 29 年度）

時間	内容	活動のねらい
14:00	入室 ①出席カード ②おしぼり ③名札 ④持ち物	・できることは自分でやるように誘い、手助けの必要な場合は、「頼む」言葉を引き出す。 ・自分のバッグなどの持ち物は自分の机の脇に置かせる。
14:05	自由遊び	・遊具で遊びながら、大人や友達との関わりを広げる。 ・担当者が他児の名前を呼びかけたり、順番や交代の場面を持ったりする。
14:20	始めの会 ①呼名 ②今日の予定 ③手遊び・歌遊び ④クイズ・読み聞かせ	・幼児の椅子をホワイトボード前に準備しておく。 ・担当者が今日の「当番」の幼児と会を進める。 ・手遊び・歌遊びを一つ、絵本を一つ程

		度用意。
14:35	今日の活動 (運動遊び・集団遊び)	・幼児は自分の椅子を移動する。 ・友達との活動を意識させる。 ・活動にそつた体の動き。 ・約束ごとへの意識をもたせる。 ・気持ちの安定を図る。
14:50	個別学習	各児童に応じた、描く・書く・見る・読む・手の操作などの学習を行う。 ・児童の興味を生かしながら援助する。
15:10	おやつタイム (保護者へのフィードバック)	・友達との場面の共有を図る。 ・約束ごとへの意識や落ち着いた行動を図る。 ・当番児童の役割を入れる。 ・お代わりは飲み物・食べ物各 1 回までとする。
15:25	帰りの会	・活動の振り返りや当番児童への称賛を行う。 ・次回の予告を行う。
15:30	さようなら	・挨拶をして、自分の持ち物を持って退室する。

1. 4. 幼児の様子の変化

14 回の教室のうち、最初の頃は、多くの幼児について“教室に入りたがらない”、“行動の切り替えがうまくいかない”、“言葉かけがあると活動に取り組める”などの特徴があつた。教室での経験が進むにつれて、“切り替えがスムーズになった”、“室内を走り回ったり、他児にぶつかったりする行動が減つた”、“言い聞かせると行動を修正した”のように、参加した全ての幼児について行動の変容が見られた。個人差が大きいものの、概して、教室での経験によって小集団での活動に取り組めるようになったと推測する。

2. 保護者教室の運営

2. 1. 参加保護者

今年度は6名が参加し、新規参加者は2名であった。話し合いは前年度より継続している保護者にリードしてもらい、スタッフが話し合いを促した。フリートークの時間を設け、保護者どうしの交流が円滑に行われるようにした。

2. 2. 保護者教室の運営

つばさ教室の時間帯に保護者教室を運営した。教室運営のスタッフとして、プロジェクト客員研究員1名（工藤）が主に担当した。責任者として研究代表者と研究分担者が対応した。

2. 3. 保護者教室の活動

2. 3. 1. 活動の流れ

教室での活動の流れは表3に記載する。

表3. 保護者教室の実施内容（平成29年度）

時間	内容
14:00	集合・本日の内容の説明
14:05	「5分間のワンポイントのお話し」
14:25	本日のテーマ 保護者どうしの意見交換
14:30	子ども教室の参観
15:15	学生による保護者へのフィードバック
15:40	子どもとの再会、終了

2. 3. 2. 「5分間のワンポイント講話」

「5分間のワンポイント講話」は、保護者教室で取り上げるべき内容（就学相談など）もあったため、毎回行ったわけではない。内容は以下に記載する。

「発達の定義」

「幼児期の学習レディネス」

「発達における奥行知覚の重要性：視覚—運動協応」

「感覚過敏と感覚鈍麻—基礎的理解」

「感覚過敏と感覚鈍麻—視覚の特異性」

「感覚過敏と感覚鈍麻—聴覚の特異性」

「感覚過敏と感覚鈍麻—触覚の特異性」

「インクルーシブ教育の意味①：デンマークに

学ぶ」

「インクルーシブ教育の意味②：デンマークに学ぶ」

2. 3. 3. 保護者どうしの話し合い

観察室から子どもの様子を観察した後に、子どもの行動について「良かった点」を自由に記述してもらった。これは、その後の保護者どうしの話し合いに用いるための材料とした。保護者どうしの話し合いでは、良かった点について話してもらった後に、子どもの普段の生活の様子について内容を広げた。子どもの普段の生活の様子について保護者どうしの共感的サポートを目的とした（ペアレント・メンターとしての効果を期待した）。

2. 4. 保護者の様子の変化

教室の初期から後期にかけて、「保護者どうしの話し合い」における自由記述の内容が変化した。子どもの行動に対して否定的であった保護者も、子どもの様子を肯定的に捉えるように変化した。また、会話量が少なかった保護者もいたが、教室に参加するにつれて、積極的に話し合いに参加する姿も見られた。

2. 5. 保護者アンケート調査について

保護者教室の最終回にアンケートを取得した。質問内容と結果を以下に示す。

① つばさ教室に参加して、お子様は楽しそうでしたか。

- ・ とても楽しそう 5名
- ・ 楽しそう 1名

※ どのような活動が楽しそうだったか（抜粋）

- ・ 自分で作ったボールやピンを使って、先生やお友達と遊ぶ活動
- ・ 幼稚園ではしないような頭を使った動きに挑戦する活動

② 教室はどうでしたか。

- ・ とてもよかった 6名

※ 保護者教室で参考になったこと（抜粋）

- ・ いろいろな情報交換ができたこと。
 - ・ 活動の参観後に「よかったこと」を書いていたので、子どものよい部分を見られるようになり、サポートシートが書きやすかった。
- ※ 保護者教室は話しやすい雰囲気が保たれていたか。

- ・ とても話しやすかった 6名

※ 参加された保護者どうしで交流できたか。

- ・ とてもよい交流ができた 5名
- ・ まあまあ交流できた 1名

③ 学生によるフィードバックの説明はどうだったか。

- ・ とてもわかりやすかった 6名

④ 今後、より良いつばさ教室にしていくために、あったらいいなと考えられるお子様の活動について。

- ・ 小学校に入学するまでにどこをどのようにトレーニングしていったらよいかというのを、親も分かるように表にでももらえたら、うちでもできると思いました。
- ・ 工作や料理など。
- ・ 現在のままでも充実していると思います。

⑤ 今後、より良い保護者教室にしていくために、あったらいいなと望まれる内容や活動について。

- ・ 保護者同士の交流の時間をもっと増やして欲しいです。
- ・ 現在でも充実していると思います。
- ・ 情報交換。

以上より、保護者の意識としては、概して、つばさ教室および保護者教室の内容に対して満足している回答が得られた。一方で、保護者教室においては、保護者どうしの話し合いの時間をもっと設けてほしいという声も普段からあがっていた。これは、保護者どうしの話し合い（共感的サポート）に効果があることを裏付けるものであり、教室運営として改善しなければならないことである。

3. 学生ボランティアに対する教育活動

つばさ教室の役割の1つとして、学生ボランティアに対する教育活動（教員養成）がある。

3. 1. 学生ボランティアの活動と意義

平成 29 年度は、学生ボランティアの参加希望者が多く、1 年生 10 名、2 年生 5 名が参加した。前期は、前年度を経験している 2 年生を中心として教材作成や幼児への支援について 1 年生への伝達がなされた。後期からは、1 年生がメインとなり（2 年生は補助となり）、幼児への支援が展開された。

教育実習を控えた時期に、幼児と接すること

は、学生にとっても有意義である。また、保護者との関わりも学ぶことができる利点がある。教材作成の方法も学ぶことができ、教員養成段階の学生にとって、つばさ教室で得られた経験は将来の教職を考える上で重要な役割を果たしている。

3. 2. 学生ボランティアの感想

つばさ教室の運営を通して、学生ボランティアの感想を自由記述で取得した（抜粋）。

- ・ 担当する幼児について、一緒に遊んだり、教材の準備をしたり、勉強したりすることで、仲良くなり、考えることができてよかった。
- ・ 幼児が用意した活動に興味を示さなかったり、意図した活動に誘えなかったりすることがあったが、担当者同士で相談したり、他の担当者のサポートをもらったりして、対応するようになった。
- ・ 始めの会やおやつ時間などで、全体を進行する経験ができてよかった。全体の動きを見ながら話をする難しさがあったが、面白かった。
- ・ 幼児が意欲を持って取り組める遊び、幼児同士の関わりをサポートする関わりをもっと考えたい。

4. まとめ

子どもの発達支援は、子どもへのアプローチだけで成立するものではない。子どもと保護者、それらを取り巻く関係機関との連携によって成立するものである。この観点で、発達障害児早期支援研究所は、つばさ教室と保護者教室を展開してきた。特に、就学については、保護者に対して様々な情報を提供することに努めている。結果として、保護者の障害受容を促し、子どもの適正就学につながっていると考えられる。

教育機関として、将来の教職を担う学生への教育活動も必要である。子どもや保護者と継続的に接することのできる当研究所の取り組みは、教員養成段階にある学生の経験として重要な意義をもつと考える。

今後、「子ども支援」、「保護者支援」、「学生ボランティアへの教育活動」を主な活動として、関連機関とも連携しながら、地域支援を担うことのできる研究所として、教育と研究を展開する。